

吉田信太郎作  
定國  
高等小學讀本唱歌  
下

國文(教)  
K120.73  
-9  
2  
東京教育出版

K120.73

39

2

國定  
高等小學讀本唱歌  
下

吉田信太作曲



郁文舍

K120.73  
39  
2

はしがき

一、本書は國定小學讀本中の韻文に曲節を附したるものなり  
さねと其韻文中には唱歌的なるあり朗讀的なるあり故に本書は朗讀的のものは省き唱歌的のもののみ曲節を附しぬ

治も  
附の  
22 7 14  
内交

- 一、本書は程度を逐ひ歌章の意義を鑑み作曲したるものなれば能く其曲想到に注意し教授するを要す
- 一、本書中一音符に二文字を配當したるはその音長を二等分するものなり

## 目次

一、氣のかはり易き男………五

一、母の愛………一〇

一、びらみっど………一六

一、強者強國………一九

一、琵琶湖………二二

一、勸學の歌………二六

一、處生の歌………三〇

— [氣のかはり易き男] —

變口調二拍子



5 5 5 2 | 3. 2 i | 6 i 6 i | 5. 0

一 ヨニオロ カナル ナトコアリ  
二 サレドモ ヒビニ オホヒナル



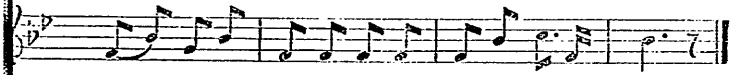
5 5 i 2 | 3. 2 i | 6 i 6 2 | i. 0

ハマメハ ツマニ ナリクルガ  
ノコギリ モツガ クルシトテ



2 2 3 2 | i 6 5 5 | 6 6 5 3 | 5. 0

テニトル チノガー オモシトテ  
マータモ コビキナ ウチステテ



5 i 6 i | 5 5 5 5 | 5 i 2. 5 | i. 0

ヤメテ コビキト カハリケリ  
コンドハ ダイクト ナリニケリ

● 氣のかはり易き男 (讀本五卷)

一 世に愚なる男あり。

はじめは、そまになりたるが、  
手にとる斧ノコギリが重しとて、

やめて、木挽ノコギリとかはりけり。

二 されども、日々に、大いなる

鋸ノコギリ持つが苦しとて、

またも木挽ノコギリをうちすて、

今度は、大工となりけり。

三 大工は手斧てうながあぶなしと、

恐れて、次は、屋根家業。

屋根の高きに驚きて、

これもつづかず、つとまらず。

四 次には、かはる疊たみさし。

とこ厚しとて、これもやめ、

鍛治屋かぢやになりてみたれども、

夏の暑さに困りたり。

五 農夫となりて、田を作る、

その職業をはじめしに、

「こえ臭ければ、いや。」といふ。

さて、その次は何なるぞ。

六 杵重きねければ、米搗こもも、

少しの間にて見限りつ。

紙屑かみくず拾ひろいはじめしが、

賤いやししきわざとて、廢やしけり。

七 あゝ。愚なるこの男。

今は、なすべきわざもなし。

若き昔の怠りを

悔いて、泣けども、いかにせん、

八 身は、はや老いて、手はきかず、

人の恵をたのみにて、

ちまたに叫び、門に乞ひ、

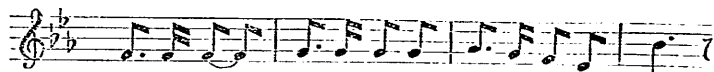
つなぐ命のあはれさよ。

— [母の愛] —

(つゝき)

— [母の愛] —

變ホ調二拍子



1. 1 1 1 3. 3 3 3 | 2. 1 2 3 5. 0  
 コエナキヨリチノノキテ  
 ココロウバハレニグヨトノ



6. 6 6 6 5. 4 3 1 | 2. 2 2 2 1. 0  
 グレモワガヤニカケコミス  
 コエモミミニハイラザリキ



2. 2 2 2 3. 3 3 3 | 4. 3 2 1 5. 0  
 マチハタチマチシツマリテ  
 サンドアハレヤクレヒトリ

九



1. 1 7 6 | 5. 5 3 1 | 2. 2 3 2 | 1. 0  
 ヒトカゲモナクナリニケリ  
 ユキテダスクルモノモナシ



1. 1 1 1 3. 3 3 3 | 2. 1 2 3 5. 0  
 シシハチリヨリニグデタリ  
 ココロニヒトリノチサナゴハ



6. 6 6 6 | 5. 4 3 1 | 2. 2 2 2 | 1. 0  
 テツノクサリチヒキキツテ  
 ハハノテモトチクチハナレ



2. 2 2 2 | 3. 3 3 3 | 4. 3 2 1 | 5. 0  
 コチラヘクルゾカマルチヨ  
 キドノホトリニキタリシガ

八



1. 1 7 6 | 5. 5 3 1 | 2. 2 3 2 | 1. 0  
 アブナシニグヨトサケブコエ  
 アツビノワザノタノシサユ

● 母 の 愛 (讀本卷五)

一 「獅子は檻より逃げ出たり。

鐵のくさりを引き切つて、

こちらへ來るぞ。かまるなよ。

あぶなし。逃げよ。」と叫ぶ聲。

聲を聞くよりをのゝきて、

誰も、わが家<sup>ヤ</sup>にかけこみぬ。

街は、たちまちしづまりて、

人影もなくなりにけり。

二 こゝに、一人の幼子<sup>なご</sup>は

母の手許をたちはなれ、

井のほとりに居たりしが、

遊のわざの楽しさに、

心奪はれ、「逃げよ。」との

聲も、耳には入らざりき。

されど、あはれや、誰、一人、

行きて助くるものもなし。

三 獅子はたけりにたけりつゝ、

狂ひまはりて吼<sup>ほ</sup>ゆる聲。



いよく近くなりたれど、

なほ、幼子は餘念なし。

つひに來りぬ。そのそばに、

眼まなこはもゆる火のごとく、

爪は劍つるぎをとぎたて、

ただ、一口と飛びかゝる。」

四

このとき、髪かみをふりみだし、  
走り出でたる一婦人。

見るより、誰も叫びたり。

「あぶなし。止めよ。ひきかへせ。

行きなば、獅子の餌えとなるぞ。

あー。不運なる子の母よ。

行くとも、もはや、救はれじ。

行かば、二人が殺されん。」

五

婦人は、耳にも入れずして、  
怒れる獅子に飛びつきぬ。

すでにくはへし幼子を、

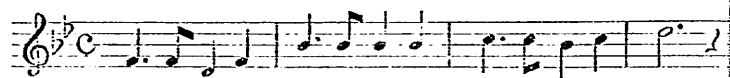
獅子の口より奪ひとる。

獅子は驚く、そのひまに、

その子は、無事に救はれぬ。

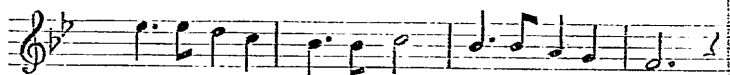
— [ びらみど ] —

變口調四拍子



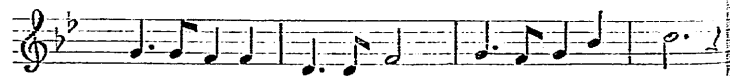
3̣. 3̣ 3̣ 3̣ | 1̣. 1̣ 1̣ 1̣ | 2̣. 2̣ 1̣ 2̣ | 3̣- 0

エジプト タイコノ ファンマイ ノ  
ヤーマト ミユレド ビラミッ ド



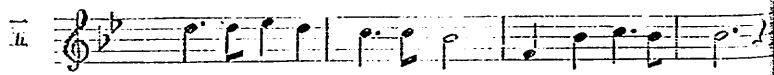
4̣. 4̣ 3̣ 2̣ | 1̣. 1̣ 2̣- | 1̣. 1̣ 7 6 | 5̣- 0

オモカゲ ノコル ビラミッ ド  
イシモテ タクミ キヅキタル



6̣. 6̣ 5̣ 5̣ | 3̣. 1̣ 5̣- | 6̣. 5̣ 6̣ 1̣ | 2̣- 0

ナイルノ キシノ ヲチコチ ニ  
ホースイ ケイノ トーニシ テ



3̣. 3̣ 4̣ 3̣ | 2̣. 2̣ 1̣- | 5̣ 1̣ 2̣. 1̣ | 1̣- 0

ヤマカト バカリ ヲビエタ リ  
ダイショー オヨツ シチショー キ

六

かくて、疵きずだになかりしは、

母の慈愛じあいにほかならず。

この有様を見し人は、

老いたる若きおしなべて、

母の慈愛の一念を

強きものぞと、感じけり、

今までふるひをのゝきし、

他の子の母もいひけるは、

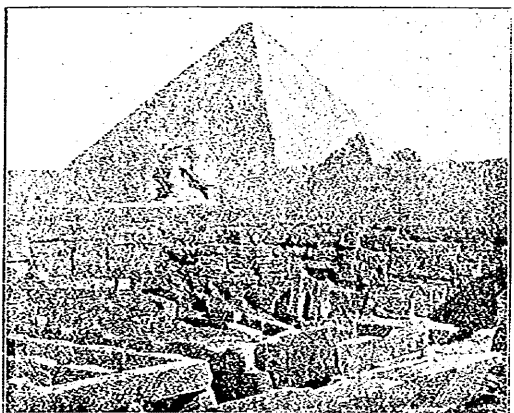
「われも、わが子のためならば、

いかで、命を惜まん」と。

● びらみつど (讀本卷六)

- 一 えじぶと太古の文明の  
面影残るびらみつど  
ないるの岸のをちこちに 山かとばかり聳えたり。
- 二 山と見ゆれどびらみつど 石もてたゝみ築きたる、  
方錐形の塔にして 大小、およそ七十基。
- 三 「大なる一基築くには、  
三十年もかゝりてぞ 成しとぐべき」と、世にはいふ。
- 四 そも、この塔はえじぶとの 國王一家の墓にして、  
その墓ごとに石柩を 地下のむろにぞをさめたる。

- 五 石柩中のなきからは、 三千年後の今も、なほ  
くづれ、くされず、そのまゝに、 みーらとなりて残るとぞ。



# 【强者強國】

～調四拍子



3. 4 5 6 | 5 5 3 1 | 2. 2 1 2 3 3 3 0

一 キョー シャー ソンシテ シャー ク シャ ホロビ  
二 シンタイ ツヨクテ ワヅラヒ シラズ



4. 4 3 2 | 1. 1 7 6 | 5. 5 1 2 | 3 2 1 0

キョー コク サカエテ シャツコク オトロフ  
イシマタ ツヨクテ モクテキ シオホス



5. 5 5 5 | 6. 6 5 5 | 4. 4 3 2 | 1 1. 2 3 0

アメツチ ヒラケシ ソノトキ コノカタ  
コーレツ キョーコク キョーシャハ ハダーフ



4. 4 3 2 | 1. 1 7 6 | 5. 5 1 3 | 2 3. 2 1 0

ターレカ イヅコカ コノリニ ハズレシ  
シロキト キナルニ カカハル モノカハ

## ● 强者強國 (讀本卷七)

一 强者存して、弱者滅び、  
強國榮えて、弱國衰ふ。

天地開けし、その時、このかた、  
たれか、いづこか、この理にはづれし。

二 身體強くて、わづらひ知らず、  
意志、また強くて、目的しおほす。

これぞ强者ぞ。 强者ははだの  
白きと、黄なるに かゝはるものかは。

# 【琵琶湖】

ニ調四拍子

1-1 3 | 2-2- | 3 2 1 3 | 5-0

一 ア - ミ ニ ハ ビ ハ コ ト テ

二 ユ - ヒ サ ス セ タ ノ カ ハ

6-i i | 7 6 5 1 | 3 3 2 2 | 1-0

ソ ノ ナ タ - カ キ コ ス イ ア リ

ワ タ ル キ - シ ャ モ コ コ ナ ヨ ク

2 2 2 2 | 3 2 1- | 3 2 1 3 | 5-0

キ ヨ ラ カ ナ ル ハ ミ ツ ノ イ ロ

ア ハ ツ ノ マ ツ ノ イ ロ ハ エ テ

6-i i | 7 6 5 1 | 3 3 2 2 | 1-0

ミ レ ド ア カ ス ハ ヤ ツ ノ ケ イ

ハ レ タ ル ソ - ラ ノ ノ ド ケ サ ヨ

三

國民あひ和し、實業榮え、兵備たらひて、國威かがやく。

四

これぞ強國。強國は位置の西と東にかゝはるものかは。強者存して、弱者滅び、強國榮えて、弱國衰ふ。

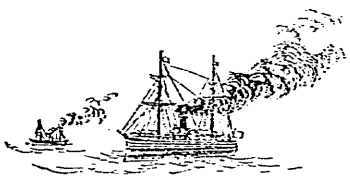
いでや。人々。強者となれや。なりて、この國強からしめよや。

琵琶湖

(讀本卷七)

二三

- 一 近江には琵琶湖とて、  
清らかなるは水の色、  
見れどあかぬは八つの景。
- 二 夕日さす勢田の川、  
粟津の松の色はえて、  
わたる汽車もこゝちよく、  
晴れたる空ののどけさよ。
- 三 石山の秋の月、  
雲をさまりて、影清し。
- 四 唐崎の一つ松、  
冬の來りてさく花は、  
比良のたかねの暮の雪。
- 五 堅田の浦の浮御堂、  
夜の雨に、名をえたり。  
落ち來る雁のながめあり。
- 三つ、五つうちつれて、  
波の上を歸り行く、  
聞きしか、三井の晩鐘を。
- 矢走の沖の舟人は、



二三

【勸學の歌】

(つづき)

1. 1 1 1 7. 7 6 6 | 7. 7 6 4 | 3. 0  
 ト シ ツ カ シ ト モー オ コ ク ル ナ  
 マ ナ ビ ノ ミ ナ ニー タ ズ サ ハ ル

2. 2 2 2 3. 3 3 3 | 4. 3 4 6 | 7. 0  
 タ ト ヘ バ ハ ル ノー ユ メ ツ カ シ  
 ヒ ト ト シ ア レ バー オ シ ナ ベ テ

3. 3 1 1 7. 7 3 3 | 1. 1 7 7 | 6. 0  
 サ メ モー ハ テ ス ニー オ イ ユ ク ト  
 カ カ ルー ナ ゲ キ ハ ア リ ス ベ シ

二五

【勸學の歌】

イ短調二拍子

3. 3 3 3 6. 6 6 6 | 1. 1 1 1 | 7. 0  
 ム カ シー モ ロ コ シ シ ュ プ ン コー  
 ニ ヒ ガ シ ト ニ シ トー ク ニ ヘ ダ テ

3. 3 1 1 7. 7 6 6 | 7. 7 7 7 | 3. 0  
 ヨ ニ ス グ レ ク ルー ハ カ セ ニ テ  
 イ ニ シー イ マ トー ヨ ハ カ ハ リ

4. 4 3 5 2. 2 3 3 | 4. 3 4 6 | 7. 0  
 シ ナ バー ツ ク リ テ イ ヒ ケ ラ ク  
 タ カ キー イ ヤ シ キ シ ナ ハ ア レ ド

二四

勸學の歌 (讀本卷八)

二六

- 一 昔もろこし朱文公、  
詩をば作りていひけらく、  
たとへば春の夢ぞかし。  
世にすぐれたる博士にて、  
「年わかしとて怠るな。  
覺めも果てぬに老いゆく。」と。
- 二 東と西と、國へだて、  
高き、いやしき品はあれど。  
人にしあれば、おしなべて、  
いにしへ、今と、世はかはり、  
學の道にたづさはる  
かゝる歎はありぬべし。
- 三 春の初花、秋の月、  
夏の青葉に、冬の雪、  
移り行く世の有様に、  
心驚くときあらば、  
過ぎし月日を數へつゝ、  
學の業を勵むべし。

- 四 ひとすぢなりし物まなび、  
「難し。」と、なほも歎きけり。  
昔賢き人たちも、  
今は、數へもあへぬまで、  
わかれたるをば、いかにして、  
おほよそ人のなしうべき。」
- 五 さはいふものゝ諺に、  
「塵ひぢ積りて、山となり、  
滴つもりて、海となる。」  
いそぐとも、世にかひあらじ。  
心しづめて、いつまでも、  
怠らぬこそ賢けれ。」
- 六 たとひ、あまたにわたらずと、  
身のためとなること多し、  
さらずば、虫に劣るべし。  
蜘蛛は網はり、蜂は又、  
蜜をつくるを見よや。見よ。」  
勉めや、勵め、たゆみなく、  
進みくゝて、よどみなく。
- 七 難きことゝて厭ふなよ。  
學の海に、舟路あり、  
教の山にしをりあり。  
なにかおそれん。おそるまじ。」

二七



— [ 處世の歌 ] —

( 〇 五 三 )



1. 1 2. 1 6. 6 5. 1 | 3. 3 2. 2 | 1. 0

チー ツ ナラ デハ ミハ タタ ズ  
セイ コー ミチ ビク リョー キョー シ  
ミチ ア ヤ マル ハー トー キナ リ



1. 5 3. 6 | 5. 3 1. 1 | 3 2. 2 5. 0

シタ シム ベキ ハキ ン ベン ヨ  
セン シン バンク ハ ワレド チ ノ  
タニ ノ ミ スガ ルド レ イ シ ン

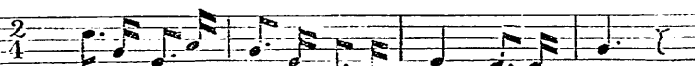


1. 5 3. 6 | 5. 3 1. 1 | 3 2. 2 1. 0

トホ ザク ベキ ハタ イ ズ ナ リ  
チカラ ナ タメ スシ キ ン セ キ  
ドレイ ノ ココロ モ ツ ナ ヌ メ

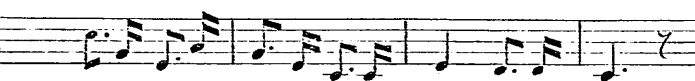
— [ 處世の歌 ] —

ハ 調二拍子



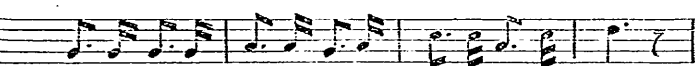
1. 5 3. 6 | 5. 3 1. 1 | 3 2. 2 5. 0

キン ベン ナレ ヨモ ノゴト ニ  
ヒヤク セツ タワ マス セ シン ハ  
ヨニ アル ヒト ハタ レモ ミ ナ



1. 5 3. 6 | 5. 3 1. 1 | 3 2. 2 1. 0

チー ツ ナレ ヨモ ノゴト ニ  
タフト フベキ ガカ ギリナ リ  
シリ ツ シ エイ チハ カルベ シ



5. 3 5. 3 | 6. 6 5. 6 | 1. 1 6. 1 | 2. 0

キン ベン ナラ デハ コー ナラ ズ  
セン シン バンク ハ ナニ ナラ ズ  
チヤク シツ コソ ハー コー ナナ セ

## ● 處世の歌

(讀本卷八)

三〇

- 一 勤勉なれよ、物ごとに。  
勤勉ならでは、功成らず、  
親むべきは勤勉よ。
  - 二 百折たわまぬ精神は、  
千辛萬苦はなにならず、  
千辛萬若は、われどちの
  - 三 世にある人は、たれも皆、  
着實こそは功を成せ、  
他にのみすがる奴隸<sup>どれい</sup>心、
  - 四 からだに、常に注意して、  
中にも酒は害多く、  
殊に、品行つゝしみて、
  - 五 儉約こそは家を興し、  
無益の費はぶきつゝ、  
いさゝかづつも貯へば、
  - 六 規律正しく、身をもたば、  
約せし時間たがへぬも、  
常に守れる規律より
  - 七 相助くるは人の道、  
人の不幸を見すぐすは、  
不幸の人に逢ひたらば、
- 忠實なれよ、物ごとに。  
忠實ならでは、身は立たず。  
遠ざくべきは怠惰なり。』  
貴ぶべきががぎりなり。  
成功導く良教師。  
力をためす試金石。』  
自立自營をはかるべし。  
身を誤るは投機なり。  
奴隸の心持つな、ゆめ。』  
健全なれと願ふべし。  
百病のもとゝいふぞかし。  
疵<sup>きず</sup>なき人となれよ。なれ。』  
身をも立つべき基<sup>もと</sup>なれ。  
いさゝかにても、財を積み。  
塵もつもりて、山となる。』  
ならひ性ともなりぬべし。  
すべての約に従ふも、  
起れることよ、おのづから。』  
人あはれむは人の道。  
人の人たる道ならず。  
我身をつみて恵むべし。』

八 かく思ひなば、我家も、 我身も、常に榮ゆべく、

社會に出てては、よき人と、 社會の人にはるべく、

國家にありては、すぐれたる 國民とこそなるべけれ。

九 重荷を負ひて、遠き道 行くにぞ似たる、人生は、

心しづかに、いそがずて、 徳をば修め、智をみがき、

御國のために勵みつゝ、 國の光をかがやかせ。



定國小學讀本唱歌 高等科終  
三、四年用終

明治卅八年七月十二日印刷  
明治卅八年七月十五日發行

高讀唱歌  
定價金拾錢

編輯者 吉田信太

發行者 東京市京橋區柳町五番地 櫻井庄吉

印刷者 東京市麴町區有樂町三丁目一番地 大西鍊三郎

印刷所 東京市京橋區弓町二十四番地 三協合資會社



發行所

東京市京橋區柳町五番地  
(電話本局三千番)  
東京市神田區錦町  
一丁目十番地

發行所 弘道館

